川上宣言

共に歩んだ水源地の村

平成25年から運用が始まった大滝ダムは、今年5周年を迎えた。川上村はこの大きな多目的事業のうねりの中を歩んできた。大滝ダムの建設が進む中、ダム運用後の村を見据えた「水源地の村づくり」をスタートさせた。その礎としてきたものは「川上宣言」である。いま平成から新しい時代を迎える節目に立ち、「川上宣言」について振り返る。都市と水源地の問題について川上村は、和歌山県の紀の川中下流域の市町村、吉野川分水や奈良県営水道で結ばれる地域の人々と交流することで、存在意義を広く発信し、川上村を、人が住み続け山と水を守っていけるような村として存続させることを目指している。その思いを平成8（1996）年に「川上宣言」として全国に発信した。

主な事業のあゆみ

一、私たち川上は
かけがえのない水が
つくられる場に暮らすものとして
下流にはいつもきれいな水を流します。

【水源地の森保全】

川上村の奥地にある吉野川（紀の川）源流の三之公地区には、広大な自然の森が、500年以上も昔からそのまま残されている。それは森と水の深い結びつきを知っていた昔の人々の知恵であり、森は恵みの雨をたくわえ、川をつくり、あらゆる生命を育み支えている。先人たちが遺してきた貴重な天然林の自然と意思をしっかりと受け継ぎ、未来へ手渡したい。川上村は、そのような思いから森の約740㌶を買い取り、吉野川源流「水源地の森」として守っている。

これは、あらゆる生命の源である水が生まれる水源地の村として、村が果たしていく役割であり、水を守るためには森を守らなければならないという結論に達したからである。そのために、三之公地区に残された天然林を平成11（1999）年から約10億円を投じて買い取り、購入してきた。川上村のこのような森林との関わりや取り組みは、地球環境を守っていく運動の起爆剤としても注目された。

森と水の源流館は川上村が設置、公益財団法人吉野川紀の川源流物語が運営。私たちの生活に欠かすことのできない「水」を育む森をはじめ、自然の持っている「美しさ、楽しさ、不思議さ」を伝えている。源流の森の四季折々の自然の営みを体感できるジオラマやパノラマ映像、川に棲（す）む生き物たちに出合える水槽や、たっぷり遊んで学べる体験プログラムなどを有している。

川上村は平成21（2009）年、独自の環境基本条例を定め、それに基づく環境基本計画を制定した。その活動の一環として、源流の住民が中下流地域を訪ね、水のつながりを実感する体験学習を毎年1回、開催している。これまでに流域の農家や漁港、直売所などを訪ねるとともに、そこで活動するキーパーソンと出会ってきた。この交流は、流域学習会として今後も続けていく計画である。

一、私たち川上は
自然と一体となった産業を育んで
山と水を守り、都市にはない
豊かな生活を築きます。

【吉野かわかみ社中】

一般社団法人・吉野かわかみ社中は、行政組織である川上村と、川上村森林組合、川上郷木材林産協同組合、吉野木材協同組合連合会、川上産吉野材販売促進協同組合が参画し、平成27（2015）年に設立された。

川上の木材生産をはじめ、川中の製材・加工・流通、川下の販売の取り組みまでを一貫して行うことで、持続可能な吉野材の一貫供給体制と情報拠点の構築を行う。村産材を安定供給できる体制をつくり、林業による村の活性化を目指す。企業ビジョンは「500年の歴史のある吉野林業を次の500年につなぎ、暮らしを支える日本の木の文化を育み、世界に誇れる吉野杉・吉野桧の『品質』と『品格』を追求し、日本の国土保全という使命を果たし、ここ吉野川の源流の村から、あしたの森、あしたの人を創生する」である。

【かわかみらいふ】

一般社団法人かわかみらいふは、平成28（2016）年に住民自らが地域を支える活動を行う団体として設立したものである。

川上村の東部は生活が不便で、高齢者の流出が続いていた。そのために高齢者が住み慣れた地域で暮らせるように、買い物を便利にできる環境を整える必要があった。

かわかみらいふは、川上村ふれあいセンターを拠点に、集落の住民の買い物支援や交流を促進する活動などを行っており、移動スーパー事業や宅配の代行配達、ガソリンスタンドやコミュニティカフェの運営など村民同士が楽しみ交流する場づくりも行っている。

かわかみらいふの移動スーパー

おおたき龍神湖

来年、村制130周年
これからも羅針盤として

一、私たち川上は
都市や平野部の人たちにも
川上の豊かな自然の価値に
ふれあってもらえるような
仕組みづくりに励みます。

【移住・定住促進】

川上村では移住・定住促進プロジェクト「仕事と住まいのワンセットプロジェクト」を発足させた。このプロジェクトは「川上i n g作戦」と命名され、川上村に来たい人、住みたい人を役場若手職員が全面的にバックアップする。その内容は「職」の相談から「住」の紹介まで、移住・定住希望者の不安を解消し、期待に応える。

具体的には地方創生プロジェクト「移住・交流フェアi n アi n大阪」への出展、川上i n gツアーや婚活イベント「かわかみ☆コンH30」の実施、シェアハウスや補助金制度の整備などがある。

一、私たち川上は
これから育つ子どもたちが
自然の生命の躍動にすなおに
感動できるような場をつくります。

【ESD推進】

川上村教育委員会は「村づくりは人づくり・人づくりは教育」を信念に、新しい21世紀を拓（ひら）き、教育の現在的課題と斬新な教育改革の理念を的確にとらえ、学校・家庭および地域社会がこれまで持ったきた教育力を生かしながら、新しい教育力の育成と円滑な連携のもと「郷土づくり」と「コミュニティづくり」に向けた教育の活性化を図っている。

「川上宣言」は、責任性と連携性、多様性と相互性を強く意識した宣言となっているため、ESD（持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目的とした教育活動）の教材として十分な価値がある。

「川上宣言」を学ぶことは、地域を自然環境だけでなく、人と人とのつながりや、文化的・歴史的視点も含めて捉え直す機会となり、自分の住む地域を大切に思う心を育てることにつながる。つまり、村の生き様が教材となる。

昨年度より森と水の源流館では、小学校の先生の授業づくりの道場「授業づくりセミナー」を実施している。現職教員が参加し、源流での取組や吉野林業について教材化し、実際に流域平野部の学校で授業が行われている。今年度は川上小学校の先生も参加し、改めて「川上宣言」や「緑のダム」について、学校での授業に組み入れ始めている。

一、私たち川上は
川上における自然との
つきあいが、地球環境に
対する人類の働きかけの
すばらしい見本に
なるよう努めます。

【環境白書掲載】

川上村では平成26（2014）年度に第5回全国源流サミットを開催した。このとき「真の流域提携とは―」をテーマに論議が行われた。また全国豊かな海づくり大会も川上村で開催された。このときのテーマは「豊かなる森をはぐくむ、川と海」であった。村ではこれらを機に、それまでの流域連携の取り組みをさらに深めるよう活動を進めてきた。

平成30年度版「環境白書」では、テーマを「地域循環共生圏の創出による持続可能な地域づくり」とし、地域資源を持続的に活用することが地域に活力をもたらす取り組みや、ライフスタイルの転換に向けた取り組み等の先進的な事例が紹介されている。その中で「流域圏」の取り組みとして、川上村の「紀の川じるし」の活動が取り上げられた。

上流・中流・下流それぞれの林業、農業、漁業を持続させることが、流域の水環境や景観・風土、そしてなりわいを守り育てていくことにつながるということを消費者に知ってもらい、選択する行動として働きかけている。流域の生産者や加工業者が集い、仲間となって活動の輪を広げている。

【ぶれない指針】

川上村には、「川上宣言」がある。白書掲載は、「下流にはいつもきれいな水を流します」の思いを流域の人々と共有することを目指して取り組んできた結果、「地球環境に対する人類の働きかけのすばらしい見本になるように努めます」に近づくことができたと言えるであろう。来年、村制130周年を迎える川上村は、これからも水の恵みを未来につなぎ続ける。

早稲田大学名誉教授　宮口（みやぐち）　侗廸（としみち）氏

「川上宣言」誕生のころ

川上村が水源地の村として、自然と共生する「川上宣言」を村是とされていることは、過疎化の進む奥地山村として極めて崇高な姿勢といえるであろう。かつて林業で栄えた村が、大きな葛藤の中でダム建設を受け入れ、平野部に水を送る貴重な役割を果たしている。

「川上宣言」が発信された平成8年は、いわゆる五全総の内容が固まりつつあったころで、筆者は国土審議会の専門委員としてその策定に関わっていた。その後法律が変わり最後の全総計画となったが、すでに始まっていたバブル崩壊を受けて、最初の委員会で、従来のような拡大成長型の計画からの方向転換を図ることが決まったことは、まだ記憶に新しい。そこでは「量よりも質」などと並んで「自然の価値の再認識」が計画の大きな前提とされた。

このような動きを反映した、当時の国土庁の、人と自然の共生に向けての調査事業の一つが平成6年度の吉野川の上下流交流調査事業であり、筆者がその座長を依頼されたのが、川上村とのご縁の始まりである。報告書のまとめ作業に入るころ、川上村役場職員の坂口泰一氏から、「ダム建設を巡って右往左往してきた村が、今後水源地の村として世の中に存在価値を発揮していくような宣言を世に示したいのだが」と相談を受けた。

地理学者である筆者には、都市には都市の価値があり、山村には山村の価値があるはずだという持論があるが、都市経済の急成長は、都市以外の価値が育ちにくく見えにくい世の中をつくってしまった。吉野林業の発祥の地として栄えた林業も低迷の時代を迎えていたが、平野部に価値ある水を供給するダムの建設のさなかにあって、なお奥地に清らかな水が生まれる貴重な自然を持つ村が、水源地の村づくりを高らかに宣言しようという発想はまさに自然の価値の再認識の時代にふさわしく、この上なく嬉（うれ）しい相談であった。

ただ、このような議論を地元で積み上げることは簡単ではない。横槍（やり）も入るであろう。その時ひらめいたのが、調査事業の報告書の最後に、水源地の価値を発揮するための地域の方向づけの提案を、「川上宣言」という形で例示しておくことであった。川上村がそれを本格的に活用される際には手直しされればいいという発想ですなおに書き上げたのが、いま大切にしていただいている「川上宣言」である。

内容は、きれいな水を流し、自然を活かした産業を育て、下流の人に自然の価値をおすそ分けし、子供が感動できる仕組みをつくり、最後はグローバルな発想で世界のいい見本にというように、極めて素朴な5か条である。私自身の山村への思いとも重なり、比較的短時間で完成できた。そしてその後川上村が森と水の源流館というビジターセンターを拠点に、さらにいまの総合計画においても、「川上宣言」の実現に向けて着実に歩んでおられることにあらためて敬意を表したい。

原稿募集

「川上宣言」と
わたし。

あなたの…
・「川上宣言」にまつわる思い出、エピソード
・「川上宣言」を知って、思ったこと
・「川上宣言」のある川上村について
・この記事を読んだ感想　など

表現は文字（作文、詩や歌、俳句）、写真や絵
なんでもかまいません。
年齢は問いません。
お子様からの投稿もお待ちしています。
お住まいも問いません。
川上村在住、在勤者はもちろん、
吉野川・紀の川流域のみなさま、
大和平野のみなさまからの
ご意見をお寄せいただくことも楽しみです。

※お預かりした原稿はお返しできませんので、コピー等をお送りください。
※後日、原本ご提供についてご相談させていただく場合があります。

くわしくはお問合せください。

奈良県川上村
森と水の源流館
http://www.genryuu.or.jp

お送り先・お問合せ先
〒639-3553 奈良県吉野郡川上村迫1374-1（宮の平）
電話 0746-52-0888　FAX 0746-52-0388
Eメール morimizu@genryuu.or.jp

入館料／一般……400円（300円）
小・中学生……200円（150円）
（　）：25名様以上団体割引

開館時間／9:00～17:00（入館受付は16:30まで）
休 館 日／毎週水曜、12月29日～1月3日

公益財団法人 吉野川紀の川源流物語